

## 第2章 実践編

## 第2章 実践編

### 第1節 特別な支援を必要とする子どもへの支援 具体例

#### 1 聞くことが苦手な子ども

子どもの様子	考えられる要因	支援
<p>○ いくつかの指示を一度に言われると、覚えておくことができず、すぐ忘れてしまう。</p>	<p>○ 情報を記憶しておくことが苦手である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 忘れてしまうことを責めない。</li> <li>・ 必要な情報は、短い言葉で端的に伝える。</li> <li>・ 具体物を示したり、黒板に書いたりするなど、目で見て分かりやすい支援を行う。</li> <li>・ 全体で指示をした後、内容を個別に確認する。</li> <li>・ 話を聞きながら、要点をメモする習慣を身に付けさせる。</li> <li>・ 伝言ゲーム、スリーヒントクイズなどを行い、聞く活動に親しむ。</li> </ul>
<p>○ 教室内外の雑音が気になる。</p>	<p>○ 必要な話とそうでない音などを区別しにくい(刺激を選択することが難しい)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 肩に触れるなどして、注意を引き付けてから話をする。</li> <li>・ 座席を指示の通りやすい位置にする。</li> <li>・ 注目しやすいように図や絵などを利用し、見て分かる教材を取り入れる。</li> <li>・ 学級内のルールを決め、お互いが静かに話を聞ける環境を作る。(図1)</li> <li>・ 学級内のルールが守れている児童生徒を褒め、モデルとして意識させることで定着を図る。</li> </ul> <div data-bbox="970 1503 1273 1883" style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: right;">くみ きき方ルール おしゃべりはやめよう。 話す人を見よう。 「いつ、どこで、だれが何を」に気をつけてきこう。 話す人が終わったら「はくしゅ」</p> </div> <p style="text-align: center;">図1</p>

○ 話の内容を理解することが苦手である。

○ 似た音を聞き分けることが苦手である。

話を聞いて、内容を理解したり、イメージしたりする力が弱い。

- ・ 正しい発音で話すことを心掛ける。
- ・ 聞き間違いそうな言葉は、文字による確認をする。
- ・ 文字当てごっこ、言葉集めなど興味を持って聞くことができるゲームなどを行う。
- ・ 興味や関心のある課題を取り入れる。
- ・ 話の内容や言葉の意味を図や絵を使って説明する（例：コミック会話 図2）。
- ・ 具体的な場面を再現して内容の理解を図る。

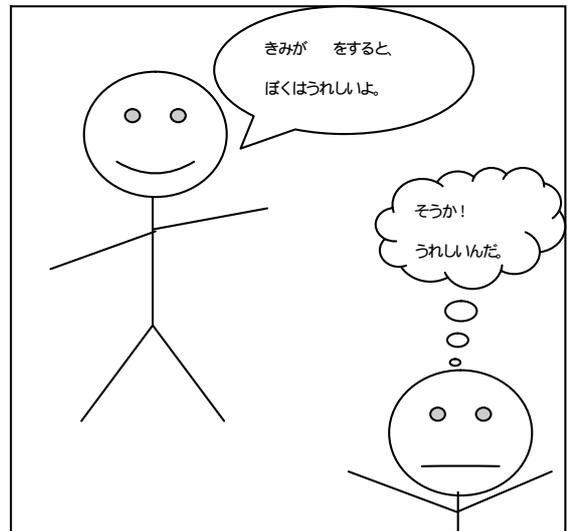


図2

## 2 話すことが苦手な子ども

子どもの様子	考えられる要因	支援												
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 会話が断片的である。</li> <li>○ 話の中で言葉につまり、「あの・・・」「えっと・・・」などの言葉がよく出る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 語いが少ない。</li> <li>○ 言葉の想起力が弱い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 伝えたいという気持ちを受け止め、共感して、話す意欲を育てる。</li> <li>・ 正しい言葉で話し掛ける。</li> <li>・ 絵カードや単語帳を用いて、使える言葉を増やす学習を行う。</li> <li>・ 言葉の連想ゲームなどを行いながら、楽しく言葉に親しむ。(例：図1)</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>「バナナといたら黄色」  「黄色といたらキリン」  「キリンといたら動物」  「動物といたらパンダ」  ・・・</p> </div> <p style="text-align: center;">図1 言葉の連想ゲーム</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 実物や写真や絵などを使いながら、話すようにする。</li> <li>・ 聞き手が、子どもの話の内容を復唱したり、「それで」などと合いの手を入れたりして、会話の継続を促す。</li> </ul>												
<p style="text-align: center;">内容を順序立てて話すことができない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 話したい言葉や内容の記憶ができない。</li> </ul> <p style="text-align: center;">話したい内容を頭の中で組み立て、文にすることが苦手である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教師の話内容を復唱させたりして文を意識させる。</li> <li>・ 作った会話文をメモし、それを見ながら話す。</li> <li>・ 言いたいことを5W1H形式のワークシート(例：図2)に整理し、それをつなげて会話文を作る練習をする。</li> <li>・ キーワードを示し、話す練習をする。</li> </ul> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; text-align: center;"> <tr> <td style="writing-mode: vertical-rl; padding: 5px;">どんな気持ち</td> <td style="writing-mode: vertical-rl; padding: 5px;">どうした</td> <td style="writing-mode: vertical-rl; padding: 5px;">なぜ</td> <td style="writing-mode: vertical-rl; padding: 5px;">どこ</td> <td style="writing-mode: vertical-rl; padding: 5px;">いつ</td> <td style="writing-mode: vertical-rl; padding: 5px;">だれ</td> </tr> <tr> <td style="writing-mode: vertical-rl; padding: 5px;">うれしかった</td> <td style="writing-mode: vertical-rl; padding: 5px;">食べた</td> <td style="writing-mode: vertical-rl; padding: 5px;">ステーキを</td> <td style="writing-mode: vertical-rl; padding: 5px;">レストランで</td> <td style="writing-mode: vertical-rl; padding: 5px;">きのう</td> <td style="writing-mode: vertical-rl; padding: 5px;">わたしは</td> </tr> </table> <p style="text-align: center;">図2 ワークシート</p>	どんな気持ち	どうした	なぜ	どこ	いつ	だれ	うれしかった	食べた	ステーキを	レストランで	きのう	わたしは
どんな気持ち	どうした	なぜ	どこ	いつ	だれ									
うれしかった	食べた	ステーキを	レストランで	きのう	わたしは									
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 思いつくままに話し、話の中心がそれてしまう。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 話の要点を維持することが困難である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本人やかかわり手が、本人の話すポイントをあらかじめカードに書いておき、それを確認しながら話すようにする。</li> </ul>												

### 3 読むことが苦手な子ども

子どもの様子	考えられる要因	支援
形がよく似た文字を読み間違ふ。	形を見分ける力が弱い。 注意力が弱い。	<ul style="list-style-type: none"> <li>似た文字のマッチング練習をする。</li> <li>読み間違ふところに印をつけ、注意できるようにする。</li> </ul>
文字を一つずつ読む。(逐次読み)	文字と音が結び付きにくい。 まとまりとしてとらえにくい。(単語・文節)	<ul style="list-style-type: none"> <li>絵を使い、文字を音と結び付ける。(かるた等)</li> <li>フラッシュカードを使って、単語として読み取る練習をする。</li> </ul>
文字や行を飛ばしたり、助詞や文末を読み間違えたりする。	文字を目で追うことが難しい。(上から下、左から右等) まとまりとしてとらえにくい。(単語・文節) 注意力が弱い。	<ul style="list-style-type: none"> <li>定規を当てたり、指でガイドしたりしながら読む。</li> <li>マーカーによる色分け、ガイドライン、文節に区切り線を入れるなどにより、まとまりを意識できるようにする。</li> <li>行間を広げたり、分かち書きにしたりする。</li> <li>読み間違えるところを事前に確認してから読む。</li> </ul>
読めない漢字が多く、音読が苦手である。	文字の形をとらえる力が弱い。 文字を記憶する力が弱い。	<ul style="list-style-type: none"> <li>読めない漢字にルビを打ち、音読練習をする。</li> <li>板書やテストなどで漢字の読みに配慮する。(読み聞かせたりルビを打ったりする。)</li> <li>授業中に音読する箇所の練習を家庭で行い、読みへの自信を付けたり自尊心に配慮したりする。</li> </ul>
文章の内容が理解できにくい。	聞いて少しの間、記憶しておくことができにくい。 文字を読む力が弱い ため、意味理解にまで注意が向かない。 文の構造が分かりにくい。	<ul style="list-style-type: none"> <li>挿絵や写真を使ったり動作化したりするなどして、イメージ化を図る。</li> <li>読み聞かせを大切にする。</li> <li>読む前に登場人物や内容、結論等を知らせる。</li> <li>話の流れを図表等で表す。</li> <li>興味・関心の高い読み物を用いて、読む力を高める。</li> </ul>

## 4 書くことが苦手な子ども

子どもの様子	考えられる要因	支援
思い出せない平仮名や片仮名があったり、拗音や促音などの特殊音節を間違っ て書いたりする。	文字と音が結び付きに くい。 音の合成分解ができに くい。 文字を記憶する力が弱 い。	<ul style="list-style-type: none"> <li>文字カードを使って単語を作る。</li> <li>単語カード同士や単語カードと絵カードのマッチングをする。(「クシとクジ」 「マチとマッチ」など)</li> <li>「50音表」を活用する。</li> <li>パソコンのワープロ機能を活用する。</li> </ul>
鏡文字(左右が反 転した文字)になっ たり、書き方を間違 えたりしてしまう。	空間関係をとらえる力 が弱い。 形を見分ける力が弱 い。	<ul style="list-style-type: none"> <li>文字の形の違いを言葉で伝える。(例: 「シ」は下から、「ツ」は上から)</li> <li>書き順の決まりや画の種類を伝える。</li> <li>文字の正誤の弁別練習をする。</li> </ul>
漢字をよく書き間 違える。(似ている が、どこか抜けてい たり、間違っていた りする。)	文字の形をとらえたり 記憶したりすることが苦 手である。 文字を分解合成する力 が弱い。 注意力が弱い。	<ul style="list-style-type: none"> <li>間違えた箇所をことばで表す。(例:日 は横1本、目は横2本)</li> <li>へんをつくりで漢字を覚える。(部首の 意味や漢字の成り立ちを伝える。)</li> <li>語呂合わせなど聴覚を利用して漢字を 覚える。(例:「育」なべ書いてム月)</li> <li>漢字テストは出題する漢字を少なく し、予告する。(「ハネ」など少々の間違 いは当面多めにみる。)</li> </ul>
板書した文をノー トに書き写すことが 難しい。	位置関係をとらえる力 が弱い。 目と手の協応動作が弱 い。 ノートを見ずに、黒板 を見ながら書いている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>ノートの使い方や写す場所を具体的に 指示する。</li> <li>板書と同じ手本を手元において書く。</li> <li>板書量を少なくしたり、板書の文字の 大きさや色の工夫をしたりする。</li> <li>写す量を減らしたり、穴埋めなどにし て一部だけ書かせたりする。</li> <li>ノートの升目の大きさ、罫線の間隔や 太さなどに配慮する。</li> <li>板書の文を覚えてから書く。</li> </ul>
文章を書くのが苦 手である。(何を書 いていいのかわらな かったり順序よくま とめて書けなかつた りする。)	記憶力が弱い。 時系列にまとめる力が 弱い。 企画力が弱い。	<ul style="list-style-type: none"> <li>質問して答えたことを作文としてまと め、それを視写させる。(口答作文)</li> <li>写真やパンフレットなどを活用する。</li> <li>話型に当てはめて表現させる。</li> <li>書く観点や手順を具体的に示す。</li> </ul>

## 5 計算が苦手な子ども

子どもの様子	考えられる要因	支援																								
<p><b>算数が苦手な子ども</b></p> <p>算数科の教科学習に対応するためには、基本的な数概念が獲得されている必要がある。</p>	<p>順序性の概念未発達の原因と見られる数の合成・分解の概念の未発達 空間概念の理解の弱さが原因とみられる集合や大小比較の概念の未発達 記憶の弱さが原因とみられる数概念の未定着 言語的認知の弱さが原因とみられる数概念の獲得の遅れ</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>数直線などを効果的に使用し、数量の変化を視覚的に分かりやすくする。数字カードで遊びながら合成・分解を理解する。</li> <li>上下左右など基本的な空間概念の理解を言語理解と合わせて身につけさせ、空間イメージの基礎作りを図る。</li> <li>数唱をゲーム感覚で楽しく取り組む。神経衰弱のようなゲームで記憶力を高める。</li> <li>数の変化を文章化し、さらに絵に描くなど計算を使わずに数に触れ合うことも大切な支援である。</li> </ul>																								
<p><b>言語能力の問題によるタイプ</b></p> <p>数字が読めない</p> <p>九九が覚えられない</p>	<p>九九が覚えられないなど、言葉の記憶や想起、言語的処理がうまくできない。 言語能力の障害に関連</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>聞くと混乱 書くのもよい</li> <li>用語を確認する</li> <li>絵、図、具体物を使って説明</li> <li>書くことで覚えるとよい。書いたのを読むことで覚えやすくなる。遊びを通して読むのもよい。 例 数字を書いたドミノや積み木遊び</li> <li>数字の規則性を手がかりに九九表を覚える。</li> <li>進法を使うのもよい。(例 6進法)</li> </ul> <table border="1" data-bbox="1050 1088 1422 1234"> <tr><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td></tr> <tr><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td></tr> <tr><td>⋮</td><td>⋮</td><td>⋮</td><td>⋮</td><td>⋮</td><td>⋮</td></tr> <tr><td>49</td><td>50</td><td>51</td><td>52</td><td>53</td><td>54</td></tr> </table> <p>6のだん  <math>6 \times 1 = 6</math>  <math>6 \times 2 = 12</math>          ……  <math>6 \times 9 = 54</math></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>暗唱にこだわらず、計算の時は九九表を使う。</li> </ul>	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	49	50	51	52	53	54
1	2	3	4	5	6																					
7	8	9	10	11	12																					
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮																					
49	50	51	52	53	54																					
<p><b>視覚・空間能力の障害によるタイプ</b></p> <p>計算が苦手</p>	<p>数字を唱えたり、数字を読んだりできるのに、数字の量としてのイメージがつかめない。 空間体制化の問題、具体的操作が苦手</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ことばで説明</li> <li>具体物を使って、意味の理解を確認</li> <li>位をそろえやすいように、マス目の入ったノートやプリントでする。</li> <li>計算の手順を唱えながらするとよい。 例</li> </ul> <div data-bbox="957 1579 1380 1774" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>かけ算の手順</p> <p>1のくらいの計算をする。</p> <p>10のくらいの計算をする。</p> <p>かけ算の答え同士をたす。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>「計算する順番に色分けする」「掛け合わせるものを色分けした矢印で示す」なども効果的である。</li> </ul>																								
<p>算数的な意味がつかめない</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>具体的な操作をやって見せながら、一つ一つ言語化していく。</li> </ul>																								



## 7 図形問題や空間の把握が苦手な子ども

子どもの様子	考えられる要因	支援
<p>○ 簡単な図形の仲間分けをしたり、同じ形をマッチングしたりすることが難しい。</p>	<p>○ 形の特徴を捉えることが難しい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 身近な物や場所などの形に気付かせ、いろいろな感覚を使って物の形に親しませる。</li> <li>・ 形や位置の弁別を含む遊び（「形はめパズル」「同じ形や違う形の選択課題」「ペグさし（見本合わせ）」等）を通して形や位置の学習をする。</li> <li>・ 「 」などのカードを使って、仲間分けや幾つかを組み合わせて別の形を作るゲームなどをする。</li> </ul>
<p>図形の上下の向きが変わったり、裏返ったり、回転したりした問題を理解することが難しい。</p> <p>ひし形と正方形、正方形と長方形など図形の特徴を理解することが難しく混同することがある。</p> <p>形や線が重なっていると一つ一つの図形をとらえることができない。</p>	<p>空間における位置関係の把握や頭の中で形を操作することが難しい。</p> <p>形と名前や特徴が覚えられない。</p> <p>図形の細部への注意や全体の把握に困難さがある。</p> <p>線や形を見分けることが難しい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日常生活場面や学習場面で、手を使ってかいたり、物を操作する活動や位置を意識する場面を設定し、視知覚の機能を高める。</li> <li>・ 模型を使用し、向きの変化を見せたり実際に操作したりすることで理解を促す。</li> <li>・ 頂点、辺に注目できるように印を付けたり、なぞったりする。</li> <li>・ 棒を使っていろいろな形を作り、辺の数や長さや頂点の数などに注目させる。</li> <li>・ いろいろな方向から見て、どのように見えるかを言語化して全体の形を認識する。</li> <li>・ トレーシングペーパー等を使って形を写すことで、形の認識を図る。</li> <li>・ 注目しやすいように色分けをしたり、線を太くしたりする。</li> </ul>
<p>立体図形の問題が理解できにくい。</p> <p>展開図や見取り図が理解できにくい。</p>	<p>頭の中で図を操作したり、イメージしたりすることが難しい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 展開図を作成し、組み立てたり、立体模型を展開したりするなど、操作することで立体を構成する形の理解を促す。</li> <li>・ 立体模型と展開図の対応する辺や面に印を付けたり、色分けをしたりして視覚的に分かりやすくする。</li> </ul>
<p>作図することが苦手である。</p>	<p>手先が不器用で道具をうまく使えない。</p> <p>道具の使い方が分からない。</p> <p>作図の手順が理解できない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 定規やコンパス、分度器などは、長さや大きさの違うものや、すべりにくい定規、見やすい定規などを試しながら、本人が一番使いやすいものを選ぶ。</li> <li>・ 道具を使うときは、教師が手をそえて誘導する。</li> <li>・ 道具を使うときのポイントを、コンパスなら「針をしっかりとさす。右手で上のつまみを持って、左手でノートを押さえる。鉛筆の方に少し力を入れて、つまみをぐるりと回す。」など分かりやすい言葉で説明する。</li> <li>・ 絵かき歌のように、形や書く線を言語化しながら作図する。</li> </ul>

## 8 不注意な間違いが多い子ども

子どもの様子	考えられる要因	支援
<p>テスト時に、解答欄に写し間違えるなどのミスが多い。</p>	<p>いろいろな刺激の影響を受け、書き間違えてしまう。 問題と回答欄の対応付けが分かりにくい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>文字を見やすい大きさにしたり、1題に1枚の解答用紙を用意したりする（他の刺激の影響を軽減し、問題に注目しやすくする）。</li> <li>問題と回答欄のつながりが分かるように、番号を大きい文字サイズにしたり、枠を太くしたりして強調する。対応付けについて、説明や練習の時間を取って確認する。</li> </ul>
<p>算数や数学で+ や・などの符号や単位を書き忘れたり、英語で三人称単数現在形のsや、疑問符などをしばしば書き忘れたりする。</p>	<p>複数のことに注意を払ったり、一時的に記憶したりしておくことが苦手である。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題に取り組む際の注意点やポイントを強調（短いフレーズで合い言葉的にまとめるなど）して伝えたり、目に見える形で提示したりして意識させる。</li> <li>忘れやすい項目や間違いやすい項目をリストアップし、リストを見て確認しながら問題を解く。</li> <li>問題文に書かれた、単位が分かる記述や、現在形か過去形か、肯定文か疑問文かなどが分かる記述にラインを引くなどして、注意を促す。</li> <li>興味のある英語の歌などを通して、パターンで覚える。</li> </ul>
<p>問題文を最後まで読まずに解き、間違いが多い。</p>	<p>衝動性が強く、少しの情報で判断して行動してしまう。</p> <p>自分の行動（問題文を最後まで読んだかどうかなど）を振り返ることが苦手である。 （22ページ「セルフモニタリングについて」参照）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>問題文を読む際には、大切な言葉に線を引きながら読む、最後まで読んだら印を付けるなど、問題を最後まで読むための手立てを用意し、短い問題文から段階的に練習する。</li> <li>定規などを当てて、一行ずつ確実に読む練習をする。</li> <li>問題に取り組んでいるときに、気を付ける点について言葉を掛ける。気を付けている様子が見られたら、「 に注意しているね。」などと言葉にして伝える。</li> <li>チェックリストを用い、問題を解いた後に書き忘れがないかなどの見直しを習慣化する。</li> </ul>
<p>授業中に黒板に書かれたことをノートに写す際、行をとばしたり、どの部分なのが見失ってしまったりする。</p>	<p>黒板とノートを交互に見る際、どの部分を見ていたか分からなくなる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>板書の記入方法とノートへの記入方法を対応しやすいよう、記述に関するルールを決める（項目立て、位置、枠囲みや色分け、線引きなど）。</li> <li>書いている位置を探しやすくするために、数字を付け箇条書にしたり、位置を指し棒等で示して板書を写す際の補助をしたりする。</li> </ul>

子どもの様子	考えられる要因	支援
定規で線を引く際に、正しい長さで線が引けない。	<p>黒板とノートを見ている間に、内容を忘れてしまう。</p> <p>目盛りの細かい部分を見落とす。</p> <p>不器用さの影響や、道具の使い方が分かりにくい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>板書の内容を事前にプリントしておき、手で見て写すようにする。</li> <li>見やすい定規（目盛りの大きさや定規の色の工夫）や使いやすい定規（滑り止め付きの定規を使ったり、滑り止めテープを付けたりする）を使う。</li> </ul>

#### <不注意な間違いが多い場合の全体的な留意事項>

- ・ 落ち着いて学習に取り組める環境に配慮する（前方の掲示物や不必要な音などの気になる刺激を取り除いたり、調整したりする）。
- ・ 本人の心理状態に配慮する（落ち着いて学習に取り組んだり、集中して取り組んだりするための体勢作り、意識付け、間違っただけの気持ちの切り替えなど）。
- ・ 1回に取り組む問題の量を減らしたり、数問ごとに答え合わせを行ったりする。少しずつ取り組むことで、気を付ける点に注意を向けやすくする。
- ・ 間違いやすい内容と対応方法を確認する。意識をする様子が見られたら、その場で本人に伝えてフィードバックする（セルフモニタリングのための支援：「セルフモニタリングについて」参照）。また、褒めることで意欲化を図る。

#### 「セルフモニタリング」について

行動面につまずきがある子どもの中には、「セルフモニタリングの力」、つまり自分の行動を客観的に見る力が弱いため、自分の行動を点検したり調整したりしながら行動することが難しい場合がある。この場合、周囲の者が本人の行動を分かりやすく（分かりやすい言葉で伝える、動作を交えて伝える、図や絵をかいて伝える、ビデオ等で見せるなど）伝えることが、援助として必要である。事前に、意識しておくことよい行動（望ましい行動など）を伝えたり、事後に振り返りをしたりすることも大切だが、本人が行動をしているときに、「今、をしているね。」「そのやり方はいいね。」「 に気を付けてやっているね。」など、子どもの取組の状況を解説（実況）するような言葉掛けを行うことも、子どもが自分の行動を意識したり知ったりするための手助けになる。

このほか、周囲の状況や相手の気持ちなどについても、分かりやすく伝えたり、何をどうすればよかったか、どうすればよいかなどについて一緒に考えたり教えたりしていくことも大切な支援である。

## 9 注意の集中が難しく、気が散りやすい子ども

子どもの様子	考えられる要因	支援
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 見たものや周囲の音が気になって集中することができない。 取り掛かりが遅い。</li> <li>○ 作業や課題を最後まで仕上げることができない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ あらゆる刺激に反応してしまい、必要なことに自分の意識を向けることができない。</li> <li>○ 見通しを立てて行動できない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 不必要な刺激(掲示物・騒音など)を取り除き、教室環境を整える。</li> <li>・ すべき行動に注意を向けることができるようその都度言葉掛けを行う。</li> <li>・ 座席の位置は教師の指示が伝わりやすい場所にする。</li> <li>・ 授業開始時は、興味・関心のある内容で注意を引き付ける。</li> <li>・ 本人が興味を持つような活動内容の提示や言葉掛けをして、活動に誘う。</li> <li>・ 本人の集中時間に応じて活動を区切り、段階的に時間を延ばす。集中して取り組めたときには賞賛する。</li> <li>・ タイマーや砂時計などを使って、終わりの時間を提示し、終了の目安を視覚的に確認できるようにする。</li> <li>・ 前の活動と次の活動の間に分かりやすい合図(ベル・手指サインなど)を行う。</li> <li>・ 授業の最初に作業や課題の流れを示し、見通しを持たせる。</li> <li>・ 手順表等を準備し、次にする活動を確認できるようにする。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 忘れ物が多い。 物をよくなくす。</li> </ul>	<p>記憶にとどめておく力が弱い。</p> <p>持ち物を点検する習慣が付いていない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 必要なものを表にして印を付けたり、シールをはったりして、視覚的な手掛かりを基に確認する。</li> <li>・ 持ち物チェック表を作り教師と一緒に点検する。</li> <li>・ 1週間の持ち物表などを保護者に渡して家庭で保護者と一緒に点検する。</li> </ul>
<p>整理整とんができない。</p>	<p>物を置く場所に注意を向けにくい。</p> <p>物事の順序や手順をうまくイメージできず、片付けに集中して取り組めない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 整理・整とんされた状態を写真や絵などを使って視覚的に示す。</li> <li>・ 物と置く場所がマークや色などではっきり分かるようにする。</li> <li>・ 片付けの手順を書いて示し、手順に沿って片付けの練習をする。</li> </ul>
<p>友達の物を勝手に使う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ よく似た物の形や特徴がしっかりとつかめていない。</li> <li>自分の持ち物と人の持ち物の区別がついていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ よく似た物や自分の持ち物の区別がつくように名前を付けたり、目印を付けたりする(シール、リボンなど)。</li> <li>・ 自分の持ち物を確認する時間を取る。</li> </ul>

## 10 落ち着きのない子ども

子どもの様子	考えられる要因	支援
<p>手遊びをしたり、いつも体を動かしたりする。</p> <p>授業中に立ち歩いたり、教室を飛び出したりする。</p>	<p>学習内容が分からない。 自己刺激的行動で動かしてしまう。</p> <p>見たり、聞いたりした物に気を取られてしまう。 興味のある物への気持ちを抑えにくい。 一定時間注意を集中しておくことが難しい。</p> <p>状況把握の力や耐性が弱い。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個別にかかわる時間を設定する。</li> <li>・ 取り組みそうな課題を用意する。</li> <li>・ 他人に迷惑が掛けない場合は許容する。</li> <li>・ 動かしてもよい動きに置き換える。</li> <li>・ 注意が散漫になる刺激を除くなど、教室内の環境を整える。</li> <li>・ 約束を決め、守れたら頑張りカードやシールなどで賞賛する。</li> <li>・ 始業前に体を十分に動かせる時間や場を設定する。</li> <li>・ 授業導入時の指名、教材の配付係等授業の中で活躍できる場を設定する。</li> <li>・ 席を立つ前に「手を挙げる」「『先生』と呼ぶ」等の合図を送ることを教え、許可を求める方法を教える。</li> <li>・ 許可を得る行動が定着してきたら、「1日3回まで」のような条件を決め、徐々に教室にいる時間を増やす。</li> <li>・ 離席する場合、「行ってもよい場所」「対応する人」を決めておく。</li> <li>・ 危険な場所や入ってはいけない所、触れてはいけないものには、禁止マーク（黄・赤色や×印）をはっておく。</li> <li>・ 危険な行動には、き然とした態度で接するようにし、後から自分の行動を振り返る場面を設定する。</li> <li>・ 行動を言語化させ、自問自答することで、適切な行動に結び付ける（例：「僕は、あの音が気になる。」でも、「今は、席立ちしてはいけないから我慢しよう。」）。</li> </ul>
<p>○ 授業中でもかまわずしゃべってしまい、止めることができない。</p>	<p>○ 待つことや我慢することが苦手である。</p> <p>○ 話を聞くときのルールを知らなかったり、身に付けていなかったりする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ しゃべってもよいときといけなるときとをサインやカードで知らせる。</li> <li>・ 休み時間に「 さんのおしゃべりタイム」などの時間を設定し、十分に話す時間を作る。</li> <li>・ 授業の様子をビデオに撮り、客観的に自分を見つめる力を養う（セルフモニタリング 8不注意な間違いが多い子ども：セルフモニタリングを参照）。</li> <li>・ 「挙手して指名されてから答える」という話の聞き方のルールを決めておき、意識できるように、見えるところにはっておく。</li> </ul>

## 1 1 衝動的な行動をとる子ども

子どもの様子	考えられる要因	支援
<p>話が終わらないうちに出し抜けに答えてしまう。</p>	<p>感情のコントロールができない。</p> <p>相手の表情から気持ちを読み取ることができない。</p> <p>学習スキルが身に付いていない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ スリーヒントゲームのように、考えを頭の中に留め置きながら思い巡らせて、答えをまとめる練習をさせる。</li> <li>・ いろいろな表情の顔写真を見せながら、どんな表情のときにはどんな気持ちになっているときかを考えさせる。</li> <li>・ ソーシャルストーリーを作り、反復練習をさせる。</li> <li>・ 発言カードで発言回数を意識させる。</li> </ul>
<p>他の人がしていることを邪魔する。</p>	<p>自分のやっていることが自覚できない。</p> <p>感情のコントロールができない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 何をしているか、何と言ったかなど、直前の自分についての記憶を意識させ、モニターできるようにさせる。</li> <li>・ 常に予告を心掛け、見通しを持たせるようにし、待つことを教える。</li> <li>・ 言いたいことやしたいことを、行動で表現しないで言葉で表現できるように、言葉の表現力の練習をさせる。</li> <li>・ 困ったときには、大人に訴えて助けを求めたので良いことを習慣化させる。</li> </ul>
<p>順番が守れない。</p>	<p>順位や場所にこだわっている。</p> <p>夢中になると順番を守ることを忘れる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 日常的に、早いのが優れているという価値基準でかかわることを無くする。</li> <li>・ 順位へのこだわりは、3回勝負のジャンケンなどで、負けてもよい経験をさせる。</li> <li>・ 場所へのこだわりは、並ぶ場所にマークや名前を付け、こだわる場所を保障する。</li> <li>・ 視覚情報も活用して、順番が分かるように伝える。</li> <li>・ 待つことができたなら褒め、少しずつ時間の延長を図る。</li> </ul>
<p>我慢できず、かんしゃくをおこしてしまう。</p>	<p>感情のコントロールができない。</p> <p>自分が周囲からどう見られているか分からない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 危険な場合は制止し、安全を確保する。</li> <li>・ 困った時は、大人に言葉で助けを求めることを習慣化させる。</li> <li>・ 感覚運動遊びなどで、身体イメージを育てる。</li> <li>・ 自分の今の感情の程度をパーセントなどの数字で表現させ、感情のレベルを自覚させる。</li> </ul>

## 12 人との関係がとりにくい子ども

子どもの様子	考えられる要因	支援
相手の表情や口調が読みとりにくい。	他者の感情が分かりにくい。	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手の心を理解しながら自分の行動を決める能力の発達状況を把握した上で、場面や状況に応じた相手の気持ちを教える。</li> <li>絵や簡単なお話を使って表情について説明したり、視線や身振りなどを実際に示しながらその意味を伝えたりする。</li> </ul>
場面の状況の理解が難しい。	今、目の前で何が起きているかが、見ているだけでは読みとりにくい。	<ul style="list-style-type: none"> <li>多数の視覚からの入力情報の中で、何を優先するのがその状況にふさわしいかといったスキルを身に付けさせる。</li> <li>絵や写真など視覚的な題材等を使って、場面の説明をする。</li> <li>4コマ漫画やアニメの場面を見せながら場面の移り変わりに合わせて、状況の変化に伴い事柄や気持ちが刻々と変わることを実況中継のように語りかけ聞かせる。</li> </ul>
あいさつ、お礼等がうまく言えない。人への接し方が分からない。	<p>あいさつ、お礼の意味等社会的に必要なことが分かりにくい。</p> <p>友達とどう接したらいいか分からない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>どのような場面でどんなあいさつをするのか、どのようなお礼の言葉を言うのがよいか等をまとめたマニュアル本を作り、パターンとして提示する。</li> <li>望ましい行動について、絵などの視覚的情報を言葉とともに示し、イメージとして理解させ実践化できるようにする。</li> <li>どのような話し方をすればよいか、具体的にロールプレイなどで練習させる。</li> </ul>
まわりの人が言わないことも配慮なしに言うってしまう。	<p>暗黙のルールが分かりにくい。</p> <p>このことを言ったら相手がいやな気持ちになることが分かりにくい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>なぞなぞなどの言葉遊びを通して、比喩的表現や語用論的な隠された意味の理解を促し、暗黙のルールの存在に気付かせる。</li> <li>形容詞などの中から、感情表現に使われる言葉を意識させる「言葉遊び」や「言葉集め」をさせる。</li> <li>ジェスチャーゲームを通して、身振りや表情から相手の感情や雰囲気を感じとる練習をさせる。</li> <li>実際の場では、どのように言うのがよいか考えさせるのではなく、分からない時は望ましい表現を、短い言葉ではっきりと教えるようにする。</li> </ul>

### 13 コミュニケーションが苦手な子ども

子どもの様子	考えられる要因	支援
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 話したいこと（自分が興味ある話）を相手の興味に関係なく、一方的に話す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ コミュニケーションの仕方が分からない。</li> <li>○ 相手の表情や場の雰囲気を読み取ることが苦手である。</li> <li>○ 自分の行動を客観的に振り返ることが苦手である。</li> <li>○ 特定のことに強い関心がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 話のやりとりの練習をする（聞き手と話し手の役割交代）</li> <li>・ 興味ある話題から始め、学校や家庭を舞台とした視覚的な教材を活用して、適切な会話技能を徐々に身に付けさせる。</li> <li>・ 日常生活の中で会話のルールを教え、実際のやりとりにつなげていく。</li> <li>・ 「自分が好きなことを相手が好きとは限らない」ということを折に触れて教える。</li> <li>・ 自分の話した内容や状況について確認する機会をつくる。</li> <li>・ 興味のある話題につき合う時間を別に設け、子どもの気持ちを満足させる。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 含みのある言葉や嫌みを言われても分からず、言葉どおりに受け止めてしまうことがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 比喩表現や慣用句の意味理解、皮肉など言葉の裏の意味を読み取ることが苦手である。</li> <li>○ あいまいな言い方が分かりにくい。</li> <li>○ 相手の表情や場の雰囲気を読み取ることが苦手である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 抽象的な言い方や曖昧な言い方をしないで、「何をすればいいのか」具体的な行動を伝える。</li> <li>・ 伝えたいことは分かりやすくシンプルに視覚的手がかりを使って話す。</li> <li>・ 慣用句などの言葉の意味や状況に応じた使い方を教える。</li> <li>・ 本人が理解しにくい場面については、個別に場の状況や相手との関係を説明するとともに、適切な会話や対応の仕方を教えていく。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ よく話す、相手の話を理解していない。</li> <li>○ 質問に適切に答えることができない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 聞いて理解することが苦手である。</li> <li>○ 認知に偏りがみられ、聴覚的情報処理が弱い。</li> <li>○ 行動や欲求をコントロールすることが苦手である。</li> <li>○ 相手の表情や場の雰囲気を読み取ることが苦手である。</li> <li>○ 質問に対しての答え方が分からない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 指示や情報は視覚的手がかり（絵カード、文字カードなど）や身振り・動作を使って分かりやすくシンプルに提示する。</li> <li>・ 得意な認知処理能力をいかして、人の話をしっかり聞く力を育てる（視覚的教材の活用）</li> <li>・ グループ活動の際に小人数の集団で話を聞く練習をし、徐々に集団の規模を大きくしていく。</li> <li>・ 質問の要点がはっきり分かるように話す（要点やキーワードを提示する）</li> <li>・ 話のやりとりの練習をする（聞き手と話し手の役割交代）</li> </ul>

## 14 こだわりの強い子ども

子どもの様子	考えられる要因	支援
○ 特定の遊びや活動を長時間する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自己コントロールが弱い。</li> <li>○ 特定のものに強い関心がある。</li> <li>○ 常同行動により精神的に落ち着く。</li> <li>○ 人とのコミュニケーションが楽しめない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ こだわり行動を容認し、時間や場所を制限していく。</li> <li>・ 次の活動に移りやすくなる工夫をする。(見通しが立つよう事前にスケジュールを伝えたり、遊びや活動を自己選択させたりする。)</li> <li>・ 子どもの「こだわり」に共感的に接し、子どもとかかわりながら遊びや活動を発展させる。</li> <li>・ 子どもの興味ある遊びや活動に他児を誘い、相互作用的行動を促す。</li> </ul>
○ 時間の変更ができない。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 自己コントロールが弱い。</li> <li>○ 順序へのこだわりがある。</li> <li>○ 見通しがもてない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 活動に見通しがもてるように、スケジュールや生活上の手がかり(視覚的手がかりが有効)を与える。</li> <li>・ 予定を変更するときは事前に伝える。(言葉だけでなく視覚的手がかりを提示する。)</li> <li>・ 順序へのこだわりは、最も変えやすい一部分だけの変更から始め、少しずつ変更パターンを変えていく。</li> </ul>
○ 空想の世界で一人遊びをする。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 周囲の状況に関係なく、自分の好きなことや興味のあるものをイメージしてしまう。</li> <li>○ 人とかかわって遊ぶことが苦手である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どもの興味を受け止めながらやりとりをする。</li> <li>・ 実生活の中で興味・関心のあるものを増やす。</li> <li>・ 子どもの興味ある遊びに他児を誘い、相互作用的行動を促す。</li> <li>・ 周囲の状況に気付くような言葉がけを行い、注意を喚起する。</li> <li>・ 他者とかかわる機会を増やし、人との適切なかかわり方を教える。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 特定のもの・形・色・数、材質などに固執する。</li> </ul> <p>例・白いものしか食べない(偏食)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 同じ色やデザインのものを好む。</li> <li>・ 特定の分野に詳細な知識をもつ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 強い同一性保持がある。</li> <li>○ 物事に対する興味・関心が狭い。</li> <li>○ 感覚過敏がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子どものこだわりを受け止めながら、実生活の中で興味・関心のあるものを増やす。</li> <li>・ 感覚過敏のあることを理解して、不快な刺激が少なくなるように工夫し、徐々に刺激に対する過敏性を軽減させる。</li> <li>・ 特定の強い興味が持続するといった長所(強み)を生かして、知識や技能の習得をはかる。</li> </ul>

## 15 感覚の過敏な子ども

子どもの様子	考えられる要因	支援
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 大きな音を怖がる。</li> <li>○ 特定の音が苦手である。</li> <li>○ 耳ふさぎがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 聴覚に過敏さがある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ どんな場面で、どんな音を嫌がるのか把握する。</li> <li>・ 我慢できないときには、別の部屋へ移動してもよいことを知らせるなど、本人の状態に合わせて柔軟に対応する。</li> <li>・ 音を小さくしたり苦手な音を取り除いたりする（運動会で、ピストルの代わりに笛を使うなど）。</li> <li>・ 音源を見せたり、音が鳴ることを前もって知らせたりして、予測しやすいようにする。</li> <li>・ 耳栓やイヤーマフを利用する。</li> <li>・ 大人がそばにいて、手をつないだり言葉を掛けたりして不安な気持ちを抑える。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 目ふさぎがある。</li> <li>○ いろいろなものに次々と目移りしたり触りに行ったりする。</li> <li>○ 特定の衣服にこだわる。</li> <li>○ すく靴を脱ぎたがる。靴下を履かない。</li> <li>○ のりや土に触るのを嫌がり、すぐ手を洗う。</li> <li>○ 散髪やつめ切りができない。</li> <li>○ 軽く触られただけで、驚いたり怒ったりする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 視覚に過敏さがある。</li> <li>○ 視覚情報の入力が強すぎる。</li> <li>○ 触覚に過敏さがあり、触ることや触られることに過剰な反応を示す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ カーテンを閉めたり間接照明の工夫をしたりして、刺激を少なくする。</li> <li>・ 物の配置や教材の提示の仕方を整理し、必要な情報に注目しやすくする。</li> <li>・ 感覚過敏のあることを理解し、本人が受け入れやすいものから少しずつ慣れさせる。</li> <li>・ ストレスの強い状況でこだわりが強くなることもあるので、活動に見通しを持って安心して参加できているか見直す。</li> <li>・ することや手順を分かりやすく示して、受け入れやすくする。</li> <li>・ 周囲の子どもたちに過敏さについて説明し、無理のないかわり方を知らせる。</li> <li>・ 低年齢であれば、くすぐりっこなどの遊びを通して、少しずつ身体接触に慣れさせる。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 偏食がある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 味覚や嗅覚、触覚に過敏がある。</li> <li>○ 形態や食器が変わると、どんな食べ物が分からなくなる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 家庭と連携して、食べられるものや苦手なものを把握する。</li> <li>・ 調理の過程や材料を見せて、どんな料理かを知らせ、不安を取り除く。</li> <li>・ 量を減らしたり小さく刻んだりして、食べやすくする。</li> <li>・ 食器や盛り付け方を変えてみる。</li> <li>・ 残したいことや減らしてほしいことを上手に伝える手段を教える。</li> </ul>

## 16 不器用な子どもへの支援と配慮

### 1 不器用な子どもたち

不器用といわれる子どもの中には、はしやはさみが上手に使えない、文字を書くのに時間がかかる、整理整頓が苦手という手指の不器用さを示すだけでなく、縄とびやボール操作がなかなか上手にできない、またはできるまでに時間がかかるという粗大運動に不器用さを示す子どもたちがいる。この中には、分かっているのに思ったとおりに身体や手指などを使いこなすことが難しい子どもたちが含まれている。

### 2 運動企画能力とは

運動企画能力とは、手足を含めた身体を上手く目的に応じて使いこなす能力のことである。この運動企画の基礎になっているのが身体図式（自分の身体の知覚的イメージ）であり、この身体図式は身体を使って経験していく中で培われていくものである。物に触れる、物を操作する、狭い中に入り込む、遊具で遊ぶなど、いろいろなことを経験することにより、子どもたちは自分の身体を知覚し、空間に対して働きかけ自分の世界を広げていくといわれている。

### 3 不器用な子どもたちへのかかわり

#### (1) 基本的な取り組み（運動企画能力の向上を目的として）

- 子ども一人ひとりの特性を知り、どのようなところが苦手か、どのような身体の使い方をしているかなど、姿勢や目の動きも含め子どもの状態を把握する。
- ことばだけでなく、見本を示し、実際にどうすればよいか、身体の使い方を段階付け、具体的に指導していく。
- 満足感や達成感を得られるように少しの変化も認め、自信を持たせ興味や意欲を引き出し、子ども自身が自ら取り組めるよう工夫する。そして身体を使う楽しさを経験させていく。
- 繰り返しの指導の中に、少しでもチャレンジする課題を取り入れることにより、達成感が得られ、成功体験を持てるようかかわっていく。

#### (2) 課題例（縄とび）

- 縄をまわす課題 肩から大きくまわす（片手 両手）次に肘・手首を使ってまわす。  
まわす事が難しい場合は、他の人と一緒に横に並んで、縄の左右を持ち合い身体の側方で縄をまわす、動かし方（運動感覚）を経験する。
- 跳ぶ課題 その場で跳ぶ。次にリズムをつけて跳ぶ。膝・足の動きがスムーズにできない場合はトランポリン等を利用する。つま先で跳ぶ練習を入れていく。
- 両手・足を協調して動かす課題 縄をまわす 跳ぶ まわすというリズムとタイミングを練習していく。
- 大きなフープや縄にホースを巻き、まわす感覚を感じることができるよう工夫する。
- 子どもによっては、身体の動き・使い方を一つ一つことばや動作で示すことや、鏡や映像などを使い、自分で身体の動きを確認しながら行った方が理解しやすい場合がある。

### 4 配慮事項

不器用な子に対しては、子ども自身が一番苦労していることを理解し、その子に応じた身体全体への働きかけや手指のいろいろな感覚を体験的に学ぶことが大切である。また不器用さに対する指導は、運動技能の指導ではなく子どもの発達を理解し、能力や興味に合った課題の提供や提示とともに、子どもの個性の理解や柔軟な発想も大切であり、個々に応じた支援が必要である。また、難しい場合は、段階として補助的な用具を使うことも考えていく。

## 17 特に行動上の問題がみられるときの対応

特別な支援が必要な子どもたちの中にはいじめや不登校などの問題を抱えている場合もある。そこまで行かなくても「教室から飛び出してしまう」とか「他の子どもをたたいてしまう」などの学級適応に問題を抱えている子どももいる。

### 1 先生は子どものサポーター

#### (1) よい状態を意識させる

行動上の問題を抱えている子どもであっても、よい状態(問題のない状態)があるはずである。子どもは良くないところを注意されるばかりでは、「どういうときにほめられるのか」「どういう状態がよい状態なのか」が分からないのでよい状態を意識させることが大切である。また、子どもの得意なところ、興味・関心のあるところなど子どものよいところに目を向けてそれを伸ばしていくことが大切である。

#### (2) 意図や思いを確かめる

行動は不適切であっても、本人なりに意図や思いがあるので、行動の善悪ばかりに注目せず、どういつもりだったのかをよく聞くことが大切である。しかし、中には意図や思いをうまく言えない子どももいる。また、発言と意図がずれてしまう子どももいる。子どもの不適切な行動には以下のような意味があることが多く見られるので、子どもの話を聞くだけでなく、問題となっている行動の意味を考えることが大切である。

**要求や拒否などの意図や思いをうまく伝えられない。 気持ちを抑えられない。**  
**相手の意図や気持ちを読み取ることができない。 適切な行動が分かっていない。**

子どもの行動の意味や意図を探った上で、それにふさわしい行動を教える。

#### (3) 注意・叱責よりも指示・見本を

「教室から出てはいけません」「たたいてはいけません」など、注意や叱責、禁止だけではどうしたらよいか分からない子どもがいる。「(教室から)出るときは先生に言いなさい」など、どうしたらよいかを段階的に指示することが大切である。また、適切な行動ができていない子どもをほめることでよい見本を意識させることも効果的である。

### 2 保護者との連携

子どもの誕生から今日に至るまでその子どもを育ててきた保護者はその子どものエキスパートである。まずは、保護者が子どもをどうとらえているか、どんな点が気になっているのかをよく聞くことが大切である。そして、本当に困っているのは、教師ではなく、つまずきを抱えている子どもだということを心にとめておき、子どものつまずきを改善しようとするのが、保護者との連携の第一歩である。

### 3 校内体制

行動上の問題が著しい場合、担任教師だけでは解決しないことがある。特別支援教育コーディネーターや管理職と相談しながら、子どものつまずきと学級の問題を解決していくことが大切である。それで解決しなければ、外部の関係機関に相談することも必要である。

この冊子に書いてあることは、LD、ADHD、高機能自閉症等の子どもたちだけに当てはまるものではない。すべての子どもたちに対し、このような視点でかかわってみることで一人一人の自己有能感や自尊感情を高めていくことが、「生きる力」につながるのだということを心にとめておきたい。

## 第2節 個別の教育支援計画等Q & A

### Q 1 個別の指導計画と個別の教育支援計画とはどのような違いがありますか？

**A 1** 個別の指導計画は、個々の幼児児童生徒の実態に応じて適切な指導を行うために、学校で作成されるもので、教育課程を具体化し、一人一人の指導目標や指導内容、方法を明確にして決め細やかに指導するために作成するものです。

これに対し、個別の教育支援計画は、地域で生活する一人一人の将来にわたる支援を各関係機関が連携して効果的に実施するための計画で、保護者をはじめ、教育、福祉、医療、労働等が連携協力して支援するためのツール（道具）です。

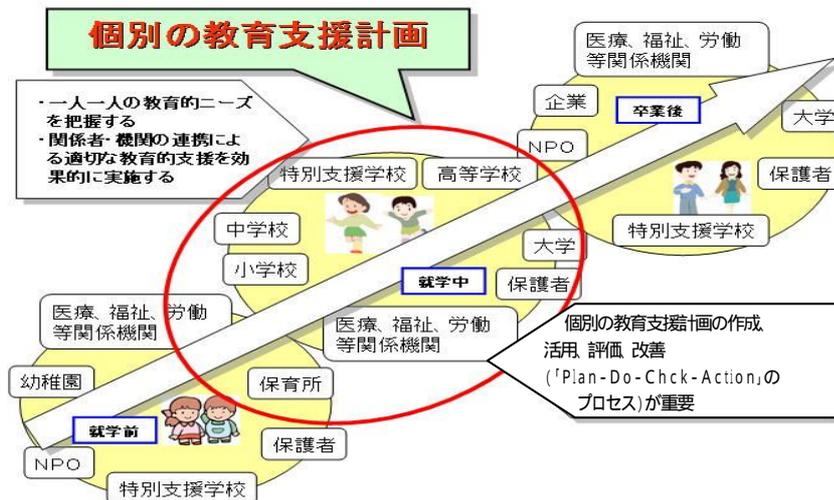
したがって、両者は次元の違うものです。トータルプランとしての個別の教育支援計画の作成を踏まえて、学校における指導のための個別の指導計画が作成されることとなります。

個別の指導計画は、個別の指導・支援の具体化であり、学校が主体となって作成します。保護者の同意を得て作ることが望ましいのですが、仮に同意がなくても作成・活用することが可能です。

一方、個別の教育支援計画は、保護者の同意を得たうえで、関係者や支援機関が参画して作成を進めていくものです。しかし、小・中学校等の場合、本人や保護者から相談がなかったり、支援に関して共通理解が得られなかったりして、個別の教育支援計画の作成に至らないことがあります。このような場合は、保護者の気持ちに寄り添いながら、個別の指導計画等を作成・活用するなどして、日々の指導の実践を地道に保護者に伝えていく必要があります。そして、管理職や特別支援教育コーディネーター等の、校内委員会による組織的な支援を受けながら、個別の教育支援計画の作成へ到達するようにしていきます。 Q & A 6 参照

## Q 2 個別の教育支援計画を作成する目的は、何ですか？

**A 2** 個別の教育支援計画は、発達障害を含め障害のある幼児児童生徒の一人一人の教育的ニーズを正確に把握し、乳幼児期から学校卒業後までの長期的な視点に立って一貫した的確な支援を行うことを目的として作成されるものです。対象となる幼児児童生徒が自立して社会参加をしていくために、教育のみならず、福祉、医療、保健、労働等の様々な側面からの取組を含め、関係機関の密接な連携協力による支援を図っていくツールが個別の教育支援計画です。



## Q 3 個別の教育支援計画の作成の対象となるのはどのような子どもですか？

**A 3** 個別の教育支援計画は、学校以外に関係機関と連携して、何らかの配慮や教育的支援を行う必要がある幼児児童生徒に対して作成していきます。特別支援学校や特別支援学級に在籍する幼児児童生徒はもちろん、幼稚園、小・中・高等学校等の通常の学級に在籍する特別な配慮や支援を必要とする幼児児童生徒も対象となります。

具体的には、視覚障害、聴覚障害、言語障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、知的障害、情緒障害、発達障害などです。

また、特に診断名がなくても、本人に困り感があって、適切な対応や支援のために、関係者・関係機関との連携が必要とされる場合なども作成の対象となります。

## Q 4 個別の教育支援計画の作成手順は？

**A 4** 個別の教育支援計画の作成の主体は学校ですが、保護者との連携が大切であり、作成や情報収集についての保護者の同意を得ることが必要です。作成に当たっては、担任の負担が大きくなるように、特別支援教育コーディネーターを中心に、校内委員会で必要な支援や助言を行うことが大切です。

### 1 特別な教育的支援の必要な幼児児童生徒への気付き

- (1) 担任等の気付き
- (2) 本人や保護者からの相談

### 2 特別支援教育校内委員会における検討

- (1) 支援が必要な幼児児童生徒について、アセスメント等により生活面、学習面、行動面の実態を把握します。
- (2) 個別の教育支援計画の作成の必要性について検討します。
- (3) 個別の教育支援計画を作成することが決まったら、関係機関と連携して支援に当たるために、保護者から作成について同意を得ます。

保護者の同意が得られにくい場合: Q & A 6 参照

### 3 保護者からの情報提供

担任は、保護者から幼児児童生徒の生育歴や本人・保護者の希望、利用している関係機関等を聞き取り、まとめます。簡易調査票を作成し、保護者に記入してもらう場合があります。

### 4 個別の教育支援計画の作成

- (1) 担任は保護者からの情報提供をもとに、個別の教育支援計画の原案を作成します。必要に応じて、特別支援教育コーディネーターの助言を得ます。
- (2) 個別の教育支援計画を、特別支援教育校内委員会において提案し、内容等について十分に検討し、必要に応じて修正します。
- (3) 作成した個別の教育支援計画を保護者に提示し、内容を確認してもらうとともに個別の教育支援計画を活用して、関係機関等と連携を図ることの同意を得ます。その際、保護者の署名、捺印をしてもらいます。資料編の様式参照
- (4) 可能であれば、学校が主催し、保護者と関係機関の参加による支援会議を開催します。そこで個別の教育支援計画を基に協議し、目標や支援内容の共通理解を図ります。

### 5 支援の実施

個別の教育支援計画をもとに、学校、家庭、関係機関それぞれが責任をもち実施します。ニーズに応じた支援目標を達成するために、互いの情報を共有して連携していきます。

## Q5 個別の教育支援計画の記載内容は？

**A5** 個別の教育支援計画に記載する内容は、おおよそ次のとおりです。なお、様式及び記入例を示していますので参考にしてください。

最初にすべての項目を記載しなければならないというのではなく、順次追加しながら充実させていくので構いません。 資料編の記入例参照

### 1 実態

- (1) 氏名、生年月日、住所、障害名、家族の状況、学習の状況、諸検査の記録、既往歴、生育歴、利用している諸機関、好きなこと・趣味、本人・保護者の希望、発達の状況等、保護者から聞き取り、了解を得た上で分かる範囲の内容を記入します。
- (2) 「学習の状況」は、達成度や習熟度、得意な分野等を記入します。
- (3) 「諸検査の記録等」は、学校や関係機関で実施した心理検査や発達検査等の記録を記入します。諸検査を実施する場合は、事前に検査の目的や結果の活用及び取扱い等を保護者等に十分説明し、保護者等の理解が得られるよう努めるとともに、承諾を得てから実施します。また、検査結果を保護者等に伝え、結果から判断できる今後の支援の在り方等について一緒に話し合うなどして、情報を共有するようにします。
- (4) 「就学・進路（将来の希望）」は、今後の進学希望や在籍学級の希望等を記入します。
- (5) 変更・追加等がある場合は、そのつど加筆し、その日付を追記します。

### 2 具体的な支援内容

- (1) 「目標」は、当該児童生徒がおおむね3年間で達成してほしい目標を設定します。
- (2) 「必要な支援内容」「実施機関、支援者等」は、各関係機関における支援内容及び担当者等を記入します。なお、学校における支援内容については、「個別の指導計画」を作成し、指導内容や指導方法をより具体化します。
- (3) 「評価・課題」は、できるだけ客観的な事実を基に評価し、次年度の計画立案に生かせるような内容を記入します。
- (4) 「支援会議（相談・ケース会議）の内容」は、いつ、誰が、何を協議し、確認したかを記入します。
- (5) 変更・追加等がある場合は、そのつど加筆し、その日付を追記します。

## Q 6 個別の教育支援計画の作成に保護者の同意が得られない場合はどうしますか？

**A 6** 保護者は重要な支援者の一人ですから個別の教育支援計画の作成、活用、評価、改善の全ての過程に参画する必要があります。しかしながら、不安や説明不足等の様々な事情により、作成について保護者の同意が得られないこともあります。そのような場合には、各学校内で収集した情報を基に記入できる範囲で個別の教育支援計画（案）を作成のうえ、必要な支援を進めながら、同時進行で保護者に対して子どもへの支援や困り感を軽減できた情報提供をするなどのアプローチも続けてください。保護者は、自分の子どもに目をかけてもらい、成長を支えて欲しいと願っており、自分の子どもの一番の理解者でもあります。保護者の否定する思いの背景にあるものに配慮しながら、「〇〇さんのよりよい成長と困り感の軽減のために一緒に考えていきましょう。」といった姿勢で、共感的に寄り添うことが参画への第一歩です。

「個別の教育支援計画を作成するので同意とともにニーズを言ってください。」といった事務的な接し方ではなく、今日に至るまでの必要な情報、保護者や本人の願い、配慮・支援してほしいこと等を謙虚な気持ちで聞かせていただく、という姿勢が大切です。そういった姿勢を見せることが、保護者と子どもに対しての支援のスタートとなります。

「保護者が作成に同意が得られないから支援ができない」「保護者の気持ちが変わるまで見守る」ということで支援をしないのではなく、保護者の理解を得る取組とともに、可能な支援を行いながら、子どもの成長や困難を乗り越えた様子を伝えるなどして、保護者と担任、特別支援教育コーディネーター等がコミュニケーションを密にし、信頼関係を築くことが大切です。

## Q 7 個別の教育支援計画の評価はどのようにして行いますか？

**A 7** 特別支援学校学習指導要領解説 総則等編では、「学校と関係機関等とが連携して、個別の教育支援計画に記述された目標や内容、支援状況やその成果等について、適宜、評価し改善を行うことにより、より適切な指導と必要な支援が実施できるようにすることが大切である。」と示されています。

関係者が共通の見通しをもって支援が行えるよう、支援の目標や内容を決める際に、その評価・見直しをいつ行うかも併せて決めておく必要があります。個別の教育支援計画を作成するためには、関係者・機関が集まり支援会議を開く場合もあれば、学校が中心となって持ち回りによる協議で関係者の共通理解を図っていく場合がありますが、そうした作成の段階で、例えば学年末など、支援の評価の時期を実状に応じて設定しておきます。

さらに、緊急に支援の必要性が生じた場合など、随時、関係者・機関と連携して、支援の目標や内容、具体的な手だてなどを修正する柔軟な対応も大切です。

また、就学前から小学校、小学校から中学校、中学校から高等学校、高等学校から卒業後の移行期には、必ず個別の教育支援計画による実践全体を評価し、次の教育機関等に必要な情報を確実に引き継ぐことが大切です。

## Q 8 個別の指導計画の作成手順は？

**A 8** 個別の指導計画は、担任や特別支援教育コーディネーターが中心となって、校内委員会で作成します。

### 1 実態把握

学校生活、家庭生活のあらゆる場面をとらえ、本人のよさに目を向け、得意なことを伸ばす視点で実態を把握します。各種検査等や行動観察、保護者からの情報などによって、基本的な生活習慣や学習、健康や体力、コミュニケーション能力や社会性等詳細に実態を把握するとともに、本人や保護者の願いや思いをまとめます。

### 2 目標の設定

総合的な実態把握をもとに、一人ひとりの具体的な目標（長期目標・短期目標）を設定します。個別の教育支援計画を作成している場合は、その内容を踏まえた上で、目標を設定します。学校・園が一方的に設定するのではなく、保護者とよく協議し共通理解を図っておくことが必要です。

### 3 手だての検討

目標を具体的な行動目標とし、それに応じた手だてを考えます。場面や時間を限定し、日常的に繰り返しできる具体的内容を手だてとして考えます。

### 4 指導の実施

指導計画を校内で共通理解し、指導を実施します。

### 5 評価、引継ぎ等

長期目標・短期目標の評価は、達成できたこととできなかったことを整理したり、標準化された検査をおこなったりして客観的に行います。短期目標を定期的に評価し、達成できた場合は次の目標にステップアップし、達成できない場合は目標や支援の手だてを再検討します。

評価し、必要であれば修正を加えながら、次の学年、学校に必ず引き継いでいきます。

## Q 9 個別の指導計画の記載内容は？

**A 9** 個別の指導計画に記載する内容は、おおよそ次のとおりです。なお、記入例を示していますので参考にしてください。

### 1 幼児児童生徒の実態

- (1) 氏名、生年月日、学年・組、性別 など
- (2) 本人の興味・関心、得意なことや苦手なこと など
- (3) 本人・保護者の願いや思い など
- (4) 生活面、学習面、遊びや運動面、社会性等の様子

### 2 目標

#### (1) 長期目標

1年後を見通して、「こんなふうになってほしい」と考える姿をイメージして目標を設定します。

#### (2) 短期目標

学期ごとあるいは、2～3か月程度短いスパンでの具体的な目標を設定します。できるだけ身近な課題をスモールステップで段階を踏み、最終的に長期目標が達成できるように設定します。

### 3 指導の手だて

指導の手だては、常に効果を見ながら修正することが必要です。

### 4 評価

幼児児童生徒の変容をより具体的な表現で記入します。

## Q10 個別の教育支援計画等の引継ぎと保管はどうしますか？

### A10

#### 【引継ぎ】

- ・ 個別の指導計画は、本人の卒業や転学時に、保護者の承諾を得て、個別の指導計画の写しを進学先、転学先に送付します。原本は、学校内の個人情報の管理に適切な場所に保管します。
- ・ 個別の教育支援計画は、本人の卒業や転学時に、原則として原本を保護者に渡し、進学先、転学先等に引き継ぐものとします。保護者が学校から進学先等へ送付を希望する場合には、学校から進学先等に直接引き継ぎます。学校には個別の教育支援計画の写しを個人情報の管理に適切な場所に保管します。
- ・ 引継ぎは、書類を送付するだけでなく、関係機関の担当者等が時間を取って話し合いを持つなど、適切な指導・支援が一貫して行われることが望めます。

#### 【保管】

- ・ 個別の指導計画の原本及び個別の教育支援計画の写しの保管期間は、卒業・転学後、5年間です。進学・転学先からの問い合わせ等に対して適切に対応できるようにしてください。
- ・ 個別の指導計画の原本及び個別の教育支援計画の写しの保管は、紙媒体のみとし、作成に使用した電子データについては適切な廃棄措置を行ってください。